

〈翻訳〉

リーディングのレトリック  
——C. S. ルイスによる西洋リテラシーの弁護——

Dr. ブルース・L・エドワーズ, Jr.  
湯 浅 恭 子 訳

イントロダクション：  
C. S. ルイスとリテラシー

詩とは白色の上に描かれた単なる黒印であると確信する人が、もし文字を読めない聴衆に向かって語らなければならないとしたら、言葉に窮することになるであろう。顕微鏡を覗き見たその黒い印から印刷機のインクを分析したとしても、「これが詩である」と語る言葉が分析する産物の中には何も発見せずに終わるであろう。しかし、読む能力のある者たちは、そこに詩が存在していると語ることができる。〔「詩編を考える」116-17〕

C. S. ルイス (1898-1963) は生前ケンブリッジ大学中世ルネッサンス文学講座の主任教授であったが、彼の人生と業績がここ10年間大きな反響を呼んでいる。生前よりも死後のほうが多作な作家活動に思える。死後数年間にルイスの作品のほとんど全てが出版されるという特異な状況にいる。彼の子供時代の絵画作品や広く知られてはいないが時折イギリスの雑誌に掲載されたエッセーや未完の小説が世に出た。ルイス著作の出版数は約55冊、その半数近くがルイスの死後出版された。

ルイス作品の多くがキリスト教擁護論 (apologetics) に関するものである。1920年代後半にクリスチャンとなったルイスは、信仰の弁護に関するエッセーやスピーチ集を発表した。これらのキリスト教関係の著作も、SF作品やファンタジー同様に一般読者に広く読まれ、ルイスの名は、特にアメリカの福音的キリスト者によく知られるようになった。ルイスの中心的職業は英文学の教授である。いわゆる「神学者」ではないということに、多くの人が意外に感じる。ルイスは神学だけでなくそれ以外の分野でも幅広い学識に裏打ち

された業績を持つ学者であるが、その一方ルイス人気の真摯さが、かえって彼を理想化する余り、ルイスに関する論理的分析を疎かにした一因がある。ルイスのキリスト教擁護論 (apologetics) やフィクション関係の学術論文には、これまでのところ簡単な賛辞、プロット要約、ルイス引用全集は合計5～6作品が存在するのみである。出版社のリストには、ルイスに関する本は一冊も存在しないようである。ルイス信奉者でさえルイスの作品及び彼等の周辺にある「ルイス系供給過多」と言えるほどの二次的情報源に言及するのみである。確かにルイスに関するどのような新出版物にも解説が今後必須になる。

「供給過多」という言葉は誤解を与えやすい。一般読者、批評家の両者ともルイス自身が著した批評書や文学論を含むルイスの著作に対する詳細な観察を怠っている。ルイスは革新的な文学批評家として長期にわたる活躍をしたが、大多数の人にとってのルイス像はキリスト教弁証家としての彼の存在だ。しかし、読者、著者、テキストに関する現代における議論に対する批評は、ルイスの他の全ての貢献に優先する。本論文においては、これらのアンバランスの修正と共に、ディスコース (言述) に対し首尾一貫した十分納得のいく理論を明確化するために、ルイスの果たした役割を指摘していく。

ルイスが時折展開した神学問題に関する批評及び議論には、ルイスが現代の批評家が直面する多くの問題を予言しているが、同時に極端に流れる批評の中間の見解を目指していることに気づく。ルイスの批評作品は、西洋リテラシーを深く弁護する立場から、著者、テキスト、読者の相互関係と、その関係を発見し喚起する世界を理解する方法を追求する。このようなリテラシーには、原文のパターンと原文の反応パターンだけでなく、西洋思想固有の認識論の理解を指摘する。文学論の現在の状態と現代的議論とのルイスの関連性を確認する前に、西洋思想の伝統におけるルイスの立場を確認する必要がある。

ピーター・シャケル (Peter Schakel) が指摘したように、ルイスの思考を最初から最後まで、継ぎ目のない上着であるかのように見てゆきたくなる誘惑がある。しかし実際は、文章構成とリーディング (読み方) という2つのプロセスに対するルイスの理解は時間とともに変化した。ルイスは、テキストの客観性と読者の主観性の問題の間にバランスを計ろうと、リーディング (読む行為) における理性と創造性の結合に努力した。ルイスは理論について直接的言及は避けた。理論よりも文学のテキスト (作品) そのものに焦点を当てる。リテラシーとその関連の問題に関するルイスの考え方には識別可能な境界線があり、ルイスの思考経路をたどる助けになる。ルイスの重要な資料の一つが、1954年ケンブリッジ大学中世ルネッサンス英文学の教授就任時の演説である。周到に読む価値のある宣言である。

同僚を前に語るこの機会が慶賀すべき時であることをルイスは強く認識していた。オッ

クスフォード大学のドンとして人生の大半をすごしてきたルイスにとって、ケンブリッジ大学新設ポストの受諾にはためらいを感じていた。しかしながら、J. R. R. トールキンとの友情は明白な例外として、オックスフォードの同僚との関係の悪化がケンブリッジに行く決心をルイスに促した大きな原因である。多少「真面目過ぎる」オックスフォードの同僚等は、キリスト教弁護家 (apologist) や児童文学の作家としてますます有名になるルイスに対し驚きを隠せなかった。同時に憤慨も感じていたために、ルイスが29年間もオックスフォードのフェローであったにもかかわらず、オックスフォードの同僚等はルイスのオックスフォード大学での教授就任に反対し続けた。学部学生用シラバス改訂を巡る些細ではあるが後悔の残る争いがきっかけとなり、ケンブリッジに行く決断をルイスにさせた。(カーペンター 228-32) この就任式という特に劇的状況において、ルイスは自分の見解を公表する機会を得た。<sup>1</sup>

「De Descriptione Temporum (時代の叙述)」と題するこの講演は、ルイスの好む主題の一つ「(中世とルネッサンス) の間で大きく強調されすぎる時代区分」という論題から始まる。(文学エッセー選集2) 文学研究を時代別におこなう困難さを認識しつつもその必要性を認識するルイスは、「中世とルネッサンスの間」に「大きな時代の区分」を置くことに断固反対する。ルイスは、「西洋史における最も良い時代区分は、現代からジェーン・オースティンとスコットの時代を分断することである」(7) と提案する。ルイスは次の4つの提言に基づいてこの問題に言及する。

1. 近代社会は「政治的秩序」の概念に変化を与えた。近代以前の時代は正義、清廉潔白、勤勉等の特質、さらに寛容さ等「支配者」に対する期待感があった。それに反し、今日の「指導者」たちは、「勢いの良さ、リーダーシップ、(私の考えでは) 世間で言われている『人を引き付ける魅力』や『人格』」(8) をもつことが期待されている。ルイスは、後者(今日の指導者)を、「広告による政府」と名付けた。

2. 近代社会は、「新しい方法、ほとんど新しいディメンション(局面)による新しさ」といえる芸術の誕生を目撃者した。(9)「前の時代に作られた詩は理解が困難である、しかし今日とは理解の方法が異なる」ということをルイスも認めた。(9) T. S. エリオットの「A Cooking Egg」について意見の異なる7人の学者がシンポジウムを開催した。ルイスはこのシンポジウムに言及し、「ホーマー又はギルガメシュ叙事詩以来の西洋の全歴史において、この変化に比べられるほど大きな屈曲や破壊は存在しない。」と結論を述べた。

3. 近代社会は、宗教的信念や「洗礼をうけていないこと」へのコンセンサスを失った。

かつては「洗礼をうけていない」ことが異教信仰への退歩と考えられたが、今はクリスチャンの過去と異教の過去の間に断固とした分断が存在しなくなった。「ポストクリスチャン化した人間が異教徒（になるわけ）ではない。結婚経験者の女が彼女の処女性を離婚によって回復が可能となる、とも言える。」(10)

4. 近代社会は、「我々の思考を超えた、はるか彼方にある変化の領域へと我々を一気に引き上げる」テクノロジーの継承者である。(10) ルイスは、農業経済から産業経済への変化は、石器時代から青銅時代、牧畜から農民時代への変化に相当すると考える。機械の到来は、自然における人間の位置を取りかえしのつかないほどに激変させた。(10) 人間関係におよぼすテクノロジーの支配の出現は、人間を根元から切断し、自然における方向性を惑わし、他の人間との関係を不能にさせた。「すでに得た商品の防衛と保存ではなく、全てのものが暫定的で変更可能であること、さらに我々が今まで獲得したことの無い商品が獲得可能となること、このような近代の大前提が人生の一大事となる。」我々西洋の先祖達がこれを知ったら、「衝撃と当惑」を感じることになるだろう。(11)

ここでルイスは、上記4つの変化が自らの生涯に及ぼした影響力の規模の追求を開始する。イリアッドからウェイバー風の小説に及ぶ文学上の「同質性 (homogeneity)」の広報係を自任するルイスは、近代という時代が非歴史的かつ反歴史であるとともに、この伝統的西洋の「同質性 (homogeneity)」から分断されていると指摘する。「非歴史的とは、多くの場合現在に近い過去の奴隷化に、それとは知らずになることを意味する。」(12) その結果、ルイスのような読者や批評家は少数派になりつつあった。(絶滅の危機に瀕した品種が徐々に減少するように、稀少価値としての特徴を失うことなく存在しているようだ。) ルイスのような「古い西洋人」は、人とは違う新奇な解釈という目的に仕えているように見える。「外国人として読まなければならないテキストを、私はネイティブとして読む。古い西洋文学を読むためには、近代文学を読むために今まで習得した考え方の大半を停止し、その習慣の多くを捨てなければならない。」(13) ルイスのような読者や批評家は近代社会の案内係としては信頼できないかもしれないが、しかし少なくとも歴史に無関心な同時代の人々に対しては、「絶滅の品種」として役に立つのかも知れない。感動的な就任演説の最後に、ルイスは警告を発した。「私個人だけでなく、皆様がこれから出会うかもしれない他の『古い西洋人』に代わって言わせてもらいます。そのようにできる間に、自分自身の絶滅の品種を使いなさい。これ以上恐竜はふえることはないから。」(14)

ルイスは「古いタイプの西洋人」と「恐竜」という姿勢を意識的に使った。ルイスが明確化を目指した内容は著書の中で暗示されている。ルイスは、寓話と象徴に関する革新的

研究書「愛のアレゴリー」を1937年に出版したが、それ以後は、これまでのルイスの暗示的スタンスを、批評論、キリスト教弁証学、フィクションの各々の作品中に明示的に表明した。オックスフォードの同僚に対しても同様の態度を示したため、ルイスは彼等から不興をかい、ルイスと意見の異なる批評家を狼狽させ、台頭する批評界においてルイスの立場は危険な状態になった。

ルイスの姿勢は、スタンドプレイとは異なる。(明らかに、ルイスは20世紀という時代を寛ぐタイプの人間ではない。自分自身の偏った嗜好を隠す気もない。) ルイスの晩年の作品の一つが「廃棄された中世のイメージ」であり、これは、中世をモデルとした世界観を徹底して解説した書である。「古い中世が、我々の先祖の喜びであったように、私にとっても喜びであった事実を隠す気はない。今までも隠してこなかった。イマジネーションの構築が、光輝、節制、さらに首尾一貫性が全て同じように結合していったとは、私には思われない。」(216)

産業革命以後発展した西洋社会が価値観、宗教観、芸術の目的に関する再定義を過激に経験してきたと、ルイスは考える。このような激変が気楽に行われる風潮や、時に深く考えることなく即座に却下する態度、重要なことを気楽に無視をする姿勢は、ルイスに恐怖感を与えた。ルイスの懸念は第一に、文明全体に対する彼の危機感、つまり特定の世界観の崩壊に切迫性を感じている点だ。ルイスが考える古い西洋の崩壊を示す最も明確な症状とは、「客観的価値の教理」が忍び寄るように拒否されていく態度である。「客観的価値の教理」とは、ルイスの著作「人間の廃絶」の中で、「ある態度が真実であり、別の態度が間違っているという信念であり、その信念に対して、宇宙も我々も存在している」とルイスが説く。

1947年出版の「人間の廃絶」は、20世紀の道德、教育、宗教における客観性の衰退に対するルイスの情熱的な分析書である。この矯正本は、不運なことに現代の学問世界ではほとんどその名が知られていない。「人間の廃絶」の中でルイスは、戦時中の作文用教科書を精力的かつ詳細に分析を行う。この教科書は、「価値観の叙述を含む文章すべてが話し手の感情についての陳述であり、」「このような陳述は重要ではない」(15)と無防備に生徒に指摘する。ルイスは、リチャード・ウィーバー(Richard Weaver)のように「概念は結果を生む」ことを理解し、あいまいな作文用教科書や新入生作文集の中の随所に押し込められた一見無害に見える芸術論が、時間をかけ劇的に社会に影響を与える性質があることを認識している。このような概念は、二者択一のリテラシー観を反映し体系化していく。次の世代には、その新たなリテラシー観に対する信頼性の保存と確立は避けがたいものとなっていく。

「人間の廃絶」と「De Descriptione Temporum」の両者が導く結論は、現在保っている人間性の尊厳 (integrity) が損失するという悲しい予言、つまりニュー・テクノロジー的実用主義の支配による西洋社会の教育の悪化を示す。この文脈のなかでルイスは、彼の周りで崩壊する文化の産物を注意深く確かめながら著作活動、講演会活動、西洋思想の保存にとって必須であると考えられるリテラシーの弁護活動を行う決断をする。このリテラシーこそが、本研究論文の出発点である。20 世紀末のリテラシーの状況は、西洋文化におけるテキスト (text)、又はテキスト性 (textuality) の位置をめぐる論争の中にあり、ルイスが 40 年前に予見したように矛盾と不適合を示している。ルイスが弁護したリテラシーに関する西洋の伝統はどのような構成となっているのか、そしてこの研究論文は、何を明確化しようとしているのか？

「リテラシー」とは、捕らえにくい言葉だ。「レトリック」「ロマン主義」同様、定義困難な用語として悪名高い言葉である。リテラシーの歴史家ハービー・グラフ (Harvey Graff) は次のように述べる。アングロアメリカ文化におけるリテラシーとは、単に読み書きの単純能力だけでなく、そこに附随する内容をさらに超えた一群の価値観や宗教性に関連がある。これらの価値観には、「感情移入、革新性、達成感、方向性、‘世界市民性’、情報、メディア認知、国家的帰属意識、テクノロジー受容、合理性、民主主義へのコミットメントから、さらに日和見主義、思考と行動の直線性、都会の住居までが含まれる。」(32)

反対に、「読み書きができない (illiterate)」や「読み書きが十分にできない (sub-literate)」という言葉は、貧困、病気、反テクノロジー、反資本主義、知性の欠如、道徳的抑制の欠損等の反社会的状況を作りだす。リテラシーは、実に多くの場合、人間性や文明と密接に一体化し、文字を持たない人は生まれの卑しい野蛮人や道徳的退行状態と見なされる。我々と同時代の文化、コンテンポラリーカルチャーに対する過剰な熱心さの結果、現代社会以前の偉大なる文明や帝国を思い起こせない時がある。これらの文明や帝国は普遍的なリテラシーに依存した安定性と社会化を求めなかった。リテラシーの偽エリート主義は弁護に値しない。

「リテラシー」の高度に名誉ある使い方を修正するために、グラフ及びその他ウォルター・オング (Walter Ong) 等の学者は、リテラシーが一組のテクノロジー (方法) だけでなく、テクノロジー又は認識論として考えるべきだと主張する。ライティングは、グラフによると、テクノロジーである。方法とは、「コミュニケーションを目的とする、手書き又は印刷された文書を暗号解析し再製造するための一組の技術」を意味する。(307) つまり、アルファベットの発明、形態論及び統語論の発展は、テクノロジーの進化の典型例

である。(この場合は、書き言葉) オングはこのリテラシーをテクノロジーとして展開し、リテラシーが、主に口頭文化よりもさらに内的で分析的な認識方法を可能とする方法だと強調する。「このような外的でテクノロジー的な道具(粘土のタブレット、皮、紙、鉄筆、ブラシ、ペン、インク)によって、以前は不可能だった種類の行動を頭で理解することができる。アリストテレスの修辞論(レトリック)や形而下学(フィジックス)などの系統的論文の存在が可能になる。」書く(ライティング)という方法論が存在しない「口頭文化には、このような著作を構成する複雑で分析的思考過程を経験する手段が存在しない。」(186)

ライティング(書く行為)は、言葉を書き写す行動だけでなく、それ自体独特の認識行為も要求されるため、リテラシーには方法(テクノロジー)だけではなく認識学も含まれる。オングは「ノエティック(知性)」という新語を造語し、人間が示す知覚的、認識的スタイルの範囲を詳述する。例えば、主に口頭文化における知性的特徴の一つは、記憶が知識の台座であり、人は記憶できる事柄を知識として知っていくことである。(これは、知識の所在を決定するような、印刷された本の形による知識の背後に権威を置く方法とは異なる。)同様に、主に口頭文化の知識は図書館の中ではなく、知識ある人、高僧等の人間の中に保存されていく。ゆえに東洋の多くの文化では年輩者への尊敬が払われる。

口唇主義からリテラシーへの動きは、「ノエティック(知性)」の一つのプロセスから別のプロセスへ動くことを意味する。我々は物事と我々自身を様々な方法で知ようになる。ライティング(書く行為)は、スピーチ(語る行為)よりも劇的に自分自身を超える。自分の記憶から知識を分断し、自己存在のテキストに移動し、そのコード(記号体系)を知る人々へのアクセスを容易にする。1) リテラシーは人間意識の内的出来事の産物であるが、プロセスでもある。2) リテラシーは、生産的人間に役立つテクノロジー(方法)である。3) リテラシーは、個々人の認識論を構成し批評的問題を提起する分析的道具であるが、この命題は広く理解されていない。人間が世界の経験を知る方法、書き言葉で忠実に記録する方法としてのリテラシーに対する我々の信頼感は、ポストモダンの時代に徐々に侵食され、直接攻撃の対象にされている。

このようにして批評家はリーディング(読む行為)という用語を使い始めた。我々の時代では、その言葉(リーディング)は、不透明で神秘的な行為へと進化する。リーディングとは、考古学の探索のように著者の精神の深みに入りこみ、望みなく入り組んだ多層構造を解釈し、読者の社会共同体の解釈上の約束を明確化し、時に自分自身の意識から幻想上の「テキスト」を読者が再制作することまでの行為を意味する。現代の批評家は前の時代の同業者よりも、読者とテキストの間に、又はテキストと著者の間に、批評家が自分を

押し付ける傾向がある。リーディング（読書）プロセスが複雑化し困惑度が高まり、批評家や理論家は、著者とテキスト本文が卑小化し、リテラシーの伝統的ベースが排除されていく。

最近の批評的アプローチは、批評家をプロセスの中に取り入れる。読者を中心とした方法、読者が全面的にテキスト本文に忠実に反応し、その忠実な反応が可能で望ましい方法であると示す代わりに、批評家を中心にしたアプローチだ。批評家自身の著作を創造的芸術的効果のレベルまで引きあげることで、批評行為を一番高い地位にすえる。彼の序文をリーディング（読書行為）とテクノロジー（方法）において議論の余地のない必要不可欠な存在へと変える。このようにして、読者は、テキストそのものではなく、批評家や彼の読書行動に心を傾けるようにする。

これに対しルイスが考える批評家の役割とは、読者の視界から残骸を駆除し、年代や文化のしみや梁からできるだけ解放し（書かれた）原文を読むことを可能にすることである。客観的価値に対するルイスの信念、徹底的な検討により知るのではなく、真に知ることのできる人間の能力への信頼、自分を越えた現実と言及する言語能力への確信によって、ルイスは権威を持って語ることのできるプラットフォーム（議論の基礎的立場）を自分のものにする。このプラットフォームは、ルイスが批評の迷宮を案内する時の洞察力とバランスのとれたガイドである。

しかし、このような信頼できるガイドのルイスを選択するのは、矛盾していると言えなくもない。すでに述べたように、卓越した批評家であり理論家としてのルイスの地位は、気軽な SF 物や子供向きの作家、キリスト教弁証家としての一般のイメージによって反対にダメージを受けている。「愛のアレゴリー」や「16 世紀英文学」等の著者としてのルイスを学者として尊敬する人物も確かにいることはいる。しかし、ルイスの名前は、彼と同時代の T. S. エリオット (T. S. Eliot) や F. R. リーヴィス (F. R. Leavis) のような一流の批評家等と同レベルで取り上げられることはない。キャサリーン・ノット (Kathleen Nott) の 1953 年に上梓された近代批評の著作には、ルイスや彼の文学サークルに対する批評家達の敵意ある見解の典型例を探することができる。ルイスの人間性を「野蛮」や「雑」という言葉で表現、ルイスは理論の本質が循環的で「ファンダメンタリスト」の通俗主義者であると結論を下す。(8, 43, 254)

B. F. スキナー (B. F. Skinner) は 1971 年に出版された「自由と尊厳を超えて」の中で、ルイスを時代遅れの「ロマン主義的」人間観の持ち主、廃棄されるべき存在と呼ぶ。<sup>2</sup> ルイスに対するさらに過激な批難は、1979 年ニューヨークタイムズ紙に掲載されたサミュエル・ハインズ (Samuel Hynes) の記事である。その中でハインズは、ルイスの著書を

2冊とりあげているが、ルイスの作品自体を考慮の対象にはほとんど置いていない。それどころか、驚く程皮肉に満ちた大演説をまくしたて、ルイスを「自分の時代から分離された」「孤立者の宗教」のキリスト教の保持者、「科学への嫌悪以外は科学の知識を持たぬ」輩と述べる。<sup>3</sup> 究極的には、ハインズが言うように、ルイスの賞賛者は、「反知性的無学文盲主義、忘政治、忘芸術、忘歴史、ルイスを案内役にキリスト教への引きこもりへの信奉」を生み出す。

ルイスの賞賛者たちを単なるルイス心酔者として無視しない程度にはあるが、ルイスの友人の中でもとりわけ彼の業績特に彼のフィクションのある部分を意図的に過小評価する傾向がはっきり見る事ができる。<sup>4</sup> 例えば、ルイスの教え子であり後に友人の一人となるジョン・ウエイン (John Wain) は、オックスフォードのドンであるルイスを回顧し次のように語る。「ルイスの小説を脇に置くことは、つまり私が手にしている本を横にどけてしまうのは、単純に悪いことだ。しかし、ルイスは晩年 SF への嗜好をさらに深めたが、それは通常は想像力の破綻の明らかな証拠と判断されるので、私は『詩編を考える』を彼の貢献度の秤の下に置き、『オックスフォード英文学の歴史』へのルイスの寄稿文を頂上に置くと思う。」<sup>5</sup> 哲学者ジョン・ビバースルイス (John Beversluis) の著作活動は、ルイスの非神話化をはかるために、ルイスがキリスト教弁証家であるために危険にさらしてしまった「英雄崇拜」とのつり合いを保つことを目指している。昨今上梓した著作でビバースルイスは、弁証学を信仰主義の適例すなわち哲学的にはもっともらしい論証と表現した。このような中傷者の批難を受容し、そこからルイスを解放し、さらにルイスに対する嘲笑に明け渡すことによって現代の嘲笑を超えたところに彼を引き上げようとする際立った運動がある。

ルイスは、評価に価するにもかかわらず拒否されてきた多くの作家たちの名誉を「リハビリ (回復)」してきたが、今度はルイス自身が、ルイス自らの名誉回復を (友人と敵両方に対して) 行うことになる。本研究の目的は、厳密にルイスの弁護のみに限定しているわけではない。しかし、他の人々がルイス作品の弱点として認識している部分を私は反対にルイスの長所として取り上げている。ルイスの賞賛者、中傷者両方がルイスについて熱心を書く時のその熱さが、良くも悪くも、ルイスが考慮に価する思想家だという見解を確信させる。

とりわけ、本研究の論調は、論議を中心に展開する。それは、ジェラルド・グラフが、著書「自己対抗の文学 (Literature Against Itself)」の中で明確に系統的に説いた仮定に基づく。

文学と人文科学の概念化は、人間性の概念と社会の中の人間観を反映し形成される。文学の多くの理論は、人間性及び健全なる社会に関する多少とも隠れた理論だ。この点の文学的思考方法は、道徳的かつ社会的思考から分離することができない。(1)

20世紀末の西洋人は「人間的な徳性 (the humanities)」の弁護ではなく、「人間であること」(つまり、自由な意志、道理をわきまえていること、言語の使用、直感性などの人間であるために必要な性質)の弁護が要求される。あらゆる方法で試練が起きている。学校、ジャーナル(学校の機関誌)、大学1年生対象必修作文コース、全くあり得ない状況、今まで全く知ることのない状況における試練である。「文学的思考法は、道徳的かつ社会的思考から分離不可能だ。」というグラフの見解をルイスはさらに強調し、近代社会が西洋の遺産と明確に分離するために生物的幻影としての男と女を製造していると、語る。「ある種の恐ろしい程の単純さによってその器官を取り除くことによって、その機能を要求する。我々は胸のない人間を作っておきながら、その人物が高い徳性と進取の気性を持つ人間であることを期待する。我々は名誉を嘲笑しつつも、我々の中に存在する反逆者に驚愕する。我々は自分で去勢しておきながら、その去勢馬が多産であることを願う。」(「人間の廃絶」35)

現代の文学論は文学概念を悪用し、リーディング・プロセスとライティング・プロセスの一部の要素(作家、テキスト、読者の「現状」)を、他の要素よりも上位に置く傾向がある。多くは、テキストと読者が特権をうける。「著者」は、「インテンショナル・ファラシイ(意図を考慮する誤謬)」を恐れるニュー・クリティシズムの批評家及び構造主義者によって、単なる一つの社会的構築として後回しにされる。客観的現実とは、ジャック・デリダ(Jacques Derrida)が「現前の形而上学(metaphysics of presence)」と呼ぶ文化的剥奪の新しい犠牲者である。

本論文の今後展開される議論は、ルイスという人物が現代理論家が論議の中で失ったリーディング・プロセスとライティング・プロセスの構成要素の関係に対してバランスの回復を計ろうとした人物であることを示すことである。ルイスは、テキストのインテグリティ(完全な状態)に信頼をおいている。つまりテキストを読みテキストに応答することと、作家又は読者の心理を探究することは別の世界であると確信している。同時にルイスはニュー・クリティシズム(新批評)の行き過ぎから離れようとする。作者の意図を真剣に受容し、テキストの本質と歴史的文脈に基づいた解釈領域を確立しようとしている。さらに、ルイスはテキストの重要性と価値の決断という重要な役割を読者に与えている。書かれたテキストに対するルイスのアプローチを検証することによって、「リーディングの

レトリック」とは何であるのか、つまり、テキストと格闘しテキストを理解するための確固とした総合的方法の仮定に接近が可能となるであろう。

私の意図は、著者、テキスト、読者間の関係（陰に陽に存在するモデル）の解明を背景に、過去 40 年間変化したルイス的リテラシーのモデルを明確化することにある。本作業に私が使用するレトリック法は、ルイス本人にできるだけ多くを語ってもらうことにより、多くの情報源からリテラシーに関するルイスの思想をルイスの規範の中に置くことにより調和を計ることが可能となる。

第一章は、リテラシーの新たなモデルを概観し、各モデルに潜在するリーディング（読解）のプロセスを比較対照する。第二章は、ルイスの認識論を検証し、テキスト本文とその機能性についてのルイスの考え方を議論する。第三章は、テキスト本文のリーディング（読解）とその解釈における著者の意図、及びその重要性についてルイスの理解方法を探る。第四章は、テキスト本文に応答し評価する読者という役割に対するルイスの見解を考察し、ジョージ・マクドナルド（George MacDonald）とウィリアム・モリス（William Morris）の両作家に対するルイスの考え方を詳細に検証する。第五章は、リーディングとライティング両方のリテラシーに対するルイスのアプローチの統合を行い、現代批評におけるルイスの位置を思索する。

文化一般に対する文学論の影響力について、ジェラルド・グラフは、次のように語る。「現況の決定的状況の一つが、文学的イデオロギーとパラダイムがこれまでは浸透不可能だった領域へと浸透したことである。その結果、文学的文化と一般社会の相反する緊張の損失が発生した。」（*Literature Against Itself*（自己対抗の文学）1-2）この「相反する緊張」の欠損により、別の選択肢が口を押さえられて、不承認の烙印をおされるために社会全体が怠慢性を受け入れていく。修辞学者と文学批評家は、C. S. ルイスの中に機智に富む世界を探索し、相反する緊張感の解明と回復の限界を目指すことになる。

## 注 記

1.

C. S. ルイスの伝記関連の主な出版物：

*Surprised by Joy: The Shape of My Early Life*, C. S. ルイス著 (C. S. Lewis) (New York: Harcourt, 1995)

\* (翻訳者注記) [「喜びの訪れ」早乙女忠, 中村邦生訳, 富山房百科文庫]

*The Letters of C. S. Lewis*, ウォーニー・ルイス編集 (W. H. Lewis, ed.) (Harbourt, 1966)

*They Stand Together: The Letters of C. S. Lewis to Arthur Greeves*, ed. Walter Hooper, (ウォルター・フーパー編集 1914-1963) (Macmillan, 1979)

*C. S. Lewis: A Biography*, ロジャー・ランズリン・グリーン及びウォルター・フーパー著 (Roger

- Lancelyn Green and Walter Hooper) (New York: Harbourt, 1974)  
*The Inklings*, ハンフリー・カーペンター著 (Humphrey Carpenter) (Boston: Houghton, 1979)
2.  
*Beyond Freedom and Dignity*, B. F. スキナー著 (B. F. Skinner) (New York: Knoph, 1971) 200-01
3.  
*The Literary Legacy of C. S. Lewis by Chad Walsh* と *C. S. Lewis at the Breakfast Table* の改訂版, サミュエル・ハインズ著 (Samuel Hynes) (New York Times Book Review, 1979 年 7 月 8 日, 26)  
参照 *The New York Times versus C. S. Lewis*, ロバート・C・ディカマラ著 (Robert C. De Camara) (National Review, 1979 年 10 月 12 日, 1306-09)  
「*The Inklings* 改訂版」クリストファー・リックス著 (Christopher Ricks) (New York Times Book Review, 1979 年 4 月 6 日, 3+)  
*Broadening the Lewisian Context: Some Suggestions*, ジェームズ・コモ著 (James Como)。コモは、本書中でルイスを現代の学者の文脈の中に位置づける。(CSL: The Bulletin of the New York C. S. Lewis Society, 1981 年 7 月 12 日, 11-15)
4.  
参照,  
*On the excesses of Appreciation*, ブルース・エドワーズ, Jr. 著 (Bruce Edwards, Jr.), CSL: The Bulletin of the New York C. S. Lewis Society, 「N. Y. C. S. ルイス協会報」11 (Jan. 1980) 3  
*A Closer Look at the 'Unorthodox' Lewis*, ドナルド・T・ウィリアム著 (Donald T. Williams), Christianity Today, 23 (21 Dec. 1979) : 24-27
5.  
*C. S. Lewis*, ジョン・ウエイン著 (John Wain), Encounter, 22 (May, 1964) : 53-54  
ed. James Como, ジェームズ・コモ編集, 「C. S. Lewis at the Breakfast Table」の中で再版, (New York: Macmillan, 1979) 68-76  
*C. S. Lewis*, ジョン・ウエイン著 (John Wain), American Scholar, 50 (1980/1981) : 73-80, 最新の興味深い論文

## 第一章：

### リテラシー（読解力）の現代的理論：

#### リーディング・ニュー・モデル

#### 3 例の概観

「私が言葉を使う時は、その意味を伝えようとしてその言葉を使う。それ以下でも、それ以上でもない。」とハンプティ・ダンプティは、少し怒った声で言った。

「問題は、言葉を使って色々な意味のことを伝えられるかどうかってこと。」とアリスは言った。

「問題は、主人がどっちかってことです。それで全て。」とハンプティ・ダンプティは言った。

「不思議の国のアリス」

## I

現代の批評論におけるルイスの立場が定義的にどうかを考える前に、まず昨今のリテラシー観を概観するほうが有益であろう。リテラシー観の概観とは、主に現代批評家によるリーディング・プロセス（読解過程）の定義の検証、すなわち読者がテキストと遭遇した際に発生する状況を批評家がどう理解するのか、方法論の検証を意味する。第一章ではリーディングの新モデル3例の概要を述べる。私の目標は、網羅的説明ではなく代理的説明を目指す。これは個々の理論の詳細な説明ではなく、多様な批評集団の視点から見た場合のリーディング・プロセスにおける前提の輪郭を述べていきたい。

多様な批評家間に様々な違いが存在するのは当然である。要約やカタログによる説明には、それらの概念の極端化、単純化もしくは湾曲化する危険性が常にある。しかし、作家観、読者観、テキスト観が混乱した泥沼状態が、認識論的旅行者を案内する明瞭な国境線と予見可能な目印のおかげで、渴いた大地へと変化している。

過去20年間の文学批評と理論における最も顕著な変化の一つが、修辞学、詩学、芸術間の和解である。修辞学、詩学、芸術は、探求（inquiry）法の別個の方法であり、相互に排他的であると言えないわけではないが、少なくとも明白な相違があると伝統的に考えられてきた。<sup>1</sup> 昨今の歴史を振り返ると、アングロサクソン系の米国人によるレトリックと文学の結合の例を簡単に見つける事ができる。修辞学者による“レトリック”の再発見は、ウエイン・ブース（Wayne Booth）にまで源をたどる事ができる。「フィクションのレトリック（The Rhetoric of Fiction）」（1961）の中でブースは、著者が自らのビジョンを読者に伝える時、その妥当性を読者に納得させる方法としてのレトリックを提案した。この画期的論文においてブースは、修辞学者の、著者、テキスト、聴衆への関心は、特別珍しいというわけではないが、文学者がフィクションと詩におけるこれら著者、テキスト、聴衆の関係分析に等しく責任をもつべきだと語る。

ブースの著書が与えた影響は、今まで隠されたまま否定されてきた文学研究における修辞学的性質が明確にされた。1970年後半から80年代前半にかけての修辞学者と文学研究者は、テキスト自体の研究から離れた後、テキスト背後の認識論の探求へと向かった。そ

の焦点が、コミュニケーションを目的としたテキストの研究から、文学の製造、受容、理解を支配する文学理論へと移動したと言っても過言ではない。<sup>2</sup>

現代の批評家は、哲学者や社会学者の領域と考えられてきた問題提起を行う。規定のテキストの理解と鑑賞からは周辺的であると考えられた問いを投げかける。このような問いかけが批評現場において支配的となってきた。

- (1) 何がテキストを構成するのか？
- (2) テキスト、読者、著者に意味は存在しているのか？
- (3) テキストは、不変で決定的なものなのか？
- (4) 文脈や慣習等は、読者がテキストを理解し受容するために重要な役割を果たしているのか？
- (5) 言語は、現実を超えた現実を表現することができるのか？
- (6) 現実に対する我々の主観的認識を越える客観的現実が存在しているのか？

リテラシーのモデルの全て、リーディング・プロセスとライティング・プロセス（読み書き過程）の全モデルには、究極的には作家、読者、テキスト間の関係の説明が必要となる。結果的には、これらの要素をどう受容するのか、何をどのように強調するのが、リーディング・モデルやテキストに対する取組みと応答の方法を決定する。本質的にリーディング・モデルには、社会におけるテキストの存在論とリテラシー論もその中に含まれる。

1930年代から50年代後半の米国の英語学科における支配的批評のパラダイム（典型例）は、ニュー・クリティシズム（新批評）であった。<sup>3</sup> ニュー・クリティシズムの批評スタンスは一枚岩ではないが、[レネ・ウエレック（Rene Wellek）がそれはこうだと皆が考えるようなものではないと断言し続けたように、ニュー・クリティシズム（新批評）として切り抜けて生きているもの]であると見なされている。そこには識別可能な集合点の存在があった。最も顕著な存在は影響力の強い2つの「正統」と呼ばれている存在である。「インテンショナル・ファラシイ（意図を考慮する誤謬）」への攻撃と、「アフェクティブ・ファラシイ（感情を考慮する誤謬）」への攻撃がさらに以下のように探求される。<sup>4</sup>

ニュー・クリティシズム（新批評）の根源は、歴史、ジャンル（風俗画）、自伝、哲学批評を含む伝統的批評研究法からの過激な離脱にある。アラステア・ファウラー（Alastair Fowler）は以下の様に説明する。ニュー・クリティシズム（新批評）の動機は、「遺伝子環境や背景について異質の雑談から離れ、作品そのものに批評の関心を向けることであった。この目的は正統化された。少なくとも豊富な宝が最高の実践者によって分配された時に、これまでのとりとめのない批評の無関連性だけでなく、新しい批評の勝利の

実によっても正統化された。」(39-40) ニュー・クリティシズム(新批評)は、従来の過剰批評を、テキストそのものが見当違いと些細さという混乱のなかで道に迷い込んだことを、原因と考える。「詩とは、存在するだけで、意味はない」というニュー・クリティシズムの有名な説示は、自立した作品(artifact)としてのテキストそれ自体に対する彼等の活気さと実直さに溢れた献身の深さを表す。テキストの「意味」とは、「メッセージ」の説明ではなく、形のなかに具現化し、形と分離不可能な内容の経験となる。

この批評概念により、ニュー・クリティシズム(新批評)は極端な反作者と反感情的スタンスに至る。「言葉のアイコン(The Verbal Icon)」の作者、ウイムザット(W. K. Wimsatt)とビアーズリー(Monroe Beardsley)によるニュー・クリティシズム(新批評)の研究は20年間の文学研究の旗印となった。「著者の目的や意図は、文学作品の意味や価値を判断する標準として取得不可能であり不適切である。」(3) 著者の意図の跡をたどる必要性から解放された批評家は、作品(artifact)を内在的調和の視点から自由に解釈することができる。「一つの詩の完成後にその言葉の歴史をたどることは、意味の解明に役にたつ。その意味とは、もし元来のパターン(型)に関連性があるのであれば、意図(の正邪)に対する疑念が、それを除外することはない。」(The Verbal Icon 281)。ファウラー(Alastair Fowler)は、アンチ・インテンショナリスト(無意図派)の派生的問題を明確に説明する。「批評家は、それ(原文の意味)の特権が考慮されなくなってから、彼等の解釈と原文の意味との関連性を考える必要がなくなり、自由に活動することが許される。実に、古い意味における意味がほとんど存在しなくなった。文学的作品は、ほとんど他の作品とは比較の対象にならない。」ファウラーはさらに以下のように指摘する。批評言語は、アンチ・インテンショナリスト(無意図派)の次の前提を反映している。「批評家は、意味の『関連』性のある『パターン(型)』について語る。もしくは、意味よりも機能を示す構造について語る。」(40)

このアンチ・インテンショナリズム(無意図主義)は、ニュー・クリティシズム(新批評)の特にI. A. リチャーズ(I. A. Richards)を始めとする拡大ストラテジーの一部分である。ポエティック・ディスコース(詩的言説)のユニークなプラットフォーム(基盤)が「普通の」言語と科学言語の区別を行う。<sup>5</sup> 詩は(作者から分断された自立的な有機的存在)であり、読者が解釈を行うのではなく、読者によって経験される存在である。それゆえに、ポエティック・ディスコース(詩的談話)は、本質的に非命題的であると考えられる。詩は、テキストの外側の現実に向かって語っていると考えられる。詩は、それ自身に「ついて」、すなわち、それ自身の想像上の世界に「ついて」語る。ポエティック・ランゲージ(詩的言述)はそれ自体の文学的領域の中でのみ行動することにより、威圧的リアリ

ズムから解放され、居住空間と時間の歴史から自由にされる。

ニュー・クリティシズム（新批評）は、解釈を規制する要素としての、著者の意図を除く。さらに常習的にパラフレイズ（言い換え）を行う読者の存在を削除することによって、テキストの完全な分離を可能とした。次にウイムザット（W. K. Wimsatt）とビアーズリー（Monroe Beardsley）によるアフェクティブ・ファラシイ（感情を考慮する誤謬）の公式を示した。「アフェクティブ・ファラシイは、詩と詩の及ぼす結果（それが何であるか、それは何を行うのか）の間に起きる混乱を意味する。」ファラシイ（誤謬）とは、「認識的懐疑論の特別なケースである。しかし、そこには懐疑論の全形態よりももっと強力な要求が存在するかのように提案がなされる。誤謬は、詩の心理的效果から批評の基準を引き出した時に始まり、印象主義と相対主義で終了する。」（21）ニュー・クリティシズム（新批評）的視点によると、インテンショナル・ファラシイとアフェクティブ・ファラシイ等の解釈のストラテジー（戦略）によって「詩それ自体、特に批評基準の対象としての詩が消滅した。」（21）これらの騒動に邪魔されないネイキット・テキスト（ありのままの解釈のはいらない原文）が精細な読み（close reading）の対象であり、テキスト分析（explication de texte）の批評的実践がアメリカ文学プラクシス（行動としての言語）の基準となった。

「フィクションのレトリック（The Rhetoric of Fiction）」を始めとするウエイン・ブース（Wayne Booth）の作品が出版された。リテラシー（literacy）とテキスト性（textuality）の見解は、それまでの30数年間は批判の対象であったが、結果的には認知される。スティーブン・メイロー（Steven Mailloux）が語るように、「このアメリカの新批評は、修辞学者の興味をほとんど引く事はなかった。読者（修辞の中心的関心）を無視するだけでなく、アフェクティブ・ファラシイ（感情を考慮する誤謬）の批判を通じて読者間の議論を妨げた。」（「文学批評と文章構成」267）

しかしながら、「Criticism（批評）」という名称のニュー・クリティシズム（新批評）は、ヒューマン・コミュニケーションの旧来のレトリックに対するノスタルジアの範中で機能している。ニュー・クリティシズム分析は、レファレンシャル・ランゲージ（参照的言語）を使用しているので、彼等が検証するテキストに関する客観的結論を表面的に指示する。それは、ともすれば他の批評家により正当化、確証化される可能性のある結論である。状況のアイロニー（表現されたことと、されるはずであったことの間のずれ）に関するジェラルド・グラフの指摘は正しいと私は考える。これは、「ポスト・ニュー・クリティシズム的解釈の唱道者」が、ニュー・クリティシズムのアンチ・リアリズム的文学観を「全体主義的社会支配への服従と同価値である」と考える状況がある。ニュー・クリティシズム

(新批評)は詩の定義を、概念的言述から分離、独立した作品と考えたが、これと同様の論理に従う最近の批評家は、「具体化 (reification)」という一つの形態を理由に、この自立性を攻撃する。ニュー・クリティシズム、現象的解剖 (phenomenological hermeneutics)、ニュー・センシビリティ・パーソナリズム (新感性人格主義)の全てを合体し、経験に対する合理的客観性に反対し、彼等が癒しを与えようとしている極性化 (polarizations)を断罪する。(Literature Against Itself 149)

文学テキスト等の特定のテキストへのアプローチ又は概念としてニュー・クリティシズムが当初始めたことが、全てのテキストへの認識論になった。今は信用に値しなくなったニュー・クリティシズム (新批評)の遺産は、新たに過激化したリテラシーとして、次のような特徴 (識別可能な特徴)を有する。1) ディスコース (言述)の産物としてテキストが創造され、次に解釈されたプロセスへと焦点がシフトしていく。2) 客観的リアリズムによって著者と読者がテキストの意味へと直接的にアクセス可能となるはずであるが、その客観的リアリズム自体が拒否されている。3) それ自身の外の世界を写す言語システムの否定。4) テキストの意味を構築する際の、読者が果たす先験的役割の宣言。5) リーディング・ライティング・アクト (読み書き行動)の発見に対する高い評価。第一には、認識的 (真理創造)方法としての読み書き行動であるが、それだけでなく、特に、分類 (真理記録)、管理的 (真理向上)、発見的 (真理発見)方法としての読み書き行動をも意味する。

## II

表面に浮上した3つのリーディング (読解)理論は、ニュー・クリティシズム (新批評)の終焉がもたらした空洞を埋めたが、この3つの理論について述べていきたいと思う。まず最初に、伝統的西洋リテラシーの拒否に関する最もラディカルな理論としてのディコンストラクション (脱構築)を検討する。次に、現存しているリーダーレスポンス (読者反応)の批評に移り、最後に「弁証法的批評」の主題のもとに集められたこれらの新しいリテラシー (読解)へのネオコンサーバティブ・レスポンス (ネオ保守主義的反応)を検討していきたい。<sup>6</sup>

### ディコンストラクション (脱構築: Deconstruction)

オブジェクティビティ (客観的価値観)は、時代に遅れた概念だ。見ていない時でも実際はそこに存在するリアリティ (現実)の概念を擁護する者はほとんど存在しない。我々

の集合的、知的先鋭さと真理への熱心な願望にもかかわらず、我々にとっての外側、つまり我々のテキストの外側は存在しない。何がリアル（現実）であるのか、何が「我々の外側」なのかを実際は発見することはできない。読者は作者が意図的に作り出したテキストに直面し作者の意味と意図を理解するものだとする見解、つまりオーソドクシイ（正統性）への高まりは、伝統的リテラシーを捕捉の解放と自己現実化としてではなく抑制の道具、「資本主義の前進」に対する市民を奴隷化するために備えるテクノエリート（技術者）の道具と見なす。

マイケル・ハロラン（Michael Halloran）は、現代の批評家の伝統的リテラシーに対するアンビバレンスと、世界と対話する可能性に対して彼等が抱く絶望感を、事実上捕らえている。

知識と世界が古典的レトリックに情報を提供するという前提を、もはや論証することはできない。外部のリアリティは、逆説的である。物理的環境の何であるかを知らうとする我々の努力が、我々が知らうと求めているものを変化させる。その結果、周知の対象は、知らうとしている対象と同様ではない。話し手と聴衆が同じ世界に住んでいると仮定し、独特の方法で行動し、思考するように話し手が聴衆を促すための方法研究はもはや適当な方法とは言えない。(624-25)

これらの新しいリテラシーは、言語の模倣機能を拒絶し、言語使用の「フリープレイ（無制限の活動）」に敵対していると思われる項目を追放しようとする。シャロン・クロウレイ（Sharon Crowley）は次のように語る。「（真実）とは、人間心理の所産であり、外的リアリティの所産ではない。レトリックの技術は、存在つまり真理を追求する技術ではない。それは、言語使用の技術である。」(279, 184) この新しいリテラシーの唱道者は、コンポーディング（作文）とリーディングのプロセスを再神秘化し、このプロセスを客観的リアリティと科学的調査の抑制から解放することによって、社会の非寛容と一般的教条主義が削減されることを望む。

ディコンストラクション（脱構築）は、伝統的西洋の認識論が現在受けているチャレンジの現状を示す代表的例である。ディコンストラクション陣営の2つの異なる現象を区別することは有益である。その最も無邪気な形式からみた場合のディコンストラクションとは、人間知識の有限性と認識の主観性を処理する試みを指す。ディコンストラクションは、我々が知識と考えている事柄の偶発的（contingent）性質を思いおこさせる。象徴と象徴それ自体の中の象徴（things-in-themselves）を安易に同一視化する我々にチャレンジを与

える。ディコンストラクションは、洞察力のある批評家には新鮮なリーディング（読み方）である。それは、内的不一致、矛盾、曖昧性のテキストを精密に調べる方法であり、同時に誘発された世界観、暗示された世界観の背後にあるテキストを解釈する方法である。ディコンストラクションは、リアリティが実は非常に深い存在であることを我々に想起させる。

ディコンストラクション的批評は、ニュー・クリティシズム的分析に実は似ている。ディコンストラクション主義者は、ディコンストラクション的詳述をニュー・クリティシズムと並列的に説明することによって、反対者からの敵意を緩和しようとする。J・ヒリス・ミラー（J. Hillis Miller）にとっての「ディコンストラクションとは、現在流行の周知の名称であるが、良いリーディング（読み方）を指す。良い読者とは、常に、過去から現在に至るまで、ディコンストラクション主義者である。」（「Composition と Decomposition」43）しかしその一方、バーバラ・ジョンソン（Barbara Johnson）は、ディコンストラクションは「テキスト内の意味の敵対する力を注意深く引き出す行為である」（5）と断言する。

これらの意見から我々が到達できる結論は、ディコンストラクション的批評家はエンプソンの「曖昧の7つの型（Seven Types of Ambiguity）」の中に発見されたリーディング原則の言い換え以上の事は何もしていないことだ。しかしこれは、ねじれを伴うニュー・クリティシズムである。これに関して、ジョナサン・カラー（Jonathan Culler）が次のように述べている。

ディスコース（言説）のディコンストラクション（脱構築）とは、テキストのレトリック・オペレーション（修辞作業）の確認が、ディスコースが哲学を擁護しつつも、いかに過小評価している事実を示す。つまり、ディスコースが依存する階層的対立（hierarchical oppositions）を示すことである。レトリック・オペレーション（修辞作業）は、キー・コンセプト（中心概念）や前提について、なぜ意見衝突が起こるのか、その理由を予想する。ディコンストラクションは、より高度の論理的原則やさらに深い理由を求める力はないが、それが脱構築している原則は使用する。ディコンストラクション（脱構築）の実践は、ディコンストラクションのシステムの条件に応じて動いているが、その目的はこのシステムを破るためであることがわかる。（「ディコンストラクションについて」86, 87, 96）

しかしディコンストラクションは、ただ単に特に困難で過酷なテキストに直面した時に

使う信奉者のための追求 (inquiry) の道具ではない。それは、リテラシーの競争相手であり、伝統的西洋リアリズムを拒絶する。すなわち、言語が実在への忠実な証言を生み出すという概念の拒絶である。ディコンストラクションの批評家の思考傾向は、全ての「インタープリテーション (解釈)」を、リーディング (読解) から常にすでに不分離状態であり、リーディングと同等の存在と考える。リチャード・ランハム (Richard Lanham) は、ディコンストラクション (脱構築) のリテラシー (読解力) は本来次のような意味があると指摘する。「社会の現実には、神に保証された安心感という意味での、独立した存在論的安心感を所有してはいない。」「それは実はドラマである。ドラマの意味はレトリック的である。ドラマを通して自己形成がなされる。」(Atkinns 6 の引用) 人は、テキストを「ディコンストラクション (脱構築)」せずにはいられない。なぜなら、テキストとその著者には、読者が彼等を理解するように要求できるほどの独立した地位や権威はない。

ディコンストラクション的追求のさらに過激な基本前提には、ヴィンセント・リーチ (Vincent Leitch) が「反歴史的文献」と呼ぶ方法がある。その最も極端な形態の場合のディコンストラクションの原則は、オブジェクティビティ (客観的価値観) やリファレンシャルティ (指示性) のような概念を文化的ファシズム的要素と考えている。これらの概念を信奉する批評家に、警察官というレッテルを張る。この警察官は、経験に関する彼等の個人的秩序を押しつけ、抑圧された読者を解放するはずの言語の楽しいフリースプレイ (無制限の活動) を抑制する。この過激なリテラシーのネット・エフェクト (究極的效果) は、読者層が著者へと降下することである。文学研究においては最も安定性と信頼性のある構成要素であるテキストは、意図された意味を保持する権威を放棄する。<sup>7</sup>

ディコンストラクション的リーディング (読み方) の起源は、フランスの哲学者ジャック・デリダ (Jacques Derrida) の言語論から始まり、J・ヒリス・ミラー (J. Hillis Miller), ジョフリー・ハートマン (Geoffrey Hartman), ポール・ド・マン (Paul de Man) 等の批評家がアメリカで一般的に知られるようになった。<sup>8</sup> デリダは、あらゆる文化的現象、活動、又は作品 (文学を含む) が記号システムであると考え、一般的な構造主義的概念から始めた。この記号構造は、内的に一致した自己同封のシステムから成り立ち、外的リアリティを受入れることなく、外的リアリティと直接関係を持つこともない。この構造主義的見解は、フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure) の言語学論を一部応用したものである。ソシュールは、意味とは言葉を指名する音素に内在する言葉の明白な性質を指すのではなく、むしろ、意味とは音素の間に存在する差異の産物であると仮定した。この差異の構造、つまり、ラング (言語) は、言語の個々の発話、パロール (言) から区別されなければならない。

ロラン・バルト (Roland Barthes) やジョナサン・カラー (Jonathan Culler) は文学作品に共通の見解を示す。文学世界の一組の約束事やコード (記号体系) に由来する「様々な要素の活動から構成されたエクリチュールの一形態」と考える。著者の意図への信用はほとんど置かれていない。通常はディスコース (言説) の創始者として解釈される「自己」が、社会的約束事の産物である構築物と考えられるからである。しかしながら、構造主義の見解には、テキストは継承されたシステムの暗黙のコードである。そのテキストの内側に存在する「フリープレー (無制限の活動)」に対する拘束が含まれる。カラー (Culler) による構造主義の目的は、「言語に対して言語学が存在するように、文学に対する詩学の構築」にある。(Structuralist Poetics 257)

しかしながら、いっそう急進的な「ポスト構造主義」のデリダは、言語が「意味する」内容を束縛する伝統的抑制を認めない。デリダは、ラングとしての言語には「中心」が存在しないと考える。つまり、最終的決定的な意味は存在しないと、ソシユールの主張する。「意味」とは単なる「差異」の産物なので、その「差異」の産物の中では、意味は「差異」の無限の逆行の中に据え置かれる。<sup>9</sup> 結果的に、「シニフィアンの無限の戯れ」のゆえに、どのような所与のテキスト (パロール) でも、意味を捉えることはできない。「記号に関する無限の戯れ」は、独断的な場合は除いて、読者が意味の明瞭な一義語をその戯れから推定することを妨げる。デリダは、決定論的テキスト観とははっきりと意見を異にする。テキストには意味の決定的核心があると考えた前提は幻想であると考えた。このように、デリダは、西洋の「プレゼンス (現前しているもの) の形而上学」を攻撃する。デリダは、テキストを真理追究の境界線化されたオブジェクト (対象) であるとみなす。その追究 (inquiry) の意味は識別力のある読者によってデコード化 (暗号解読) される。デリダは、人が「究極的には、オブジェクト (客体) ときっぱりと直面する」可能性を否定する。デリダは、サイン (記号) のフリープレー (無制限の活動) に対する究極的限度があるという信念、差異 (differance) の無限の遡及へ限度があると考えた先験哲学は、言語を直感的 (immediate) と考える西洋文化の「ロゴス中心主義」によって呼び起こされた幻想であると、強く主張する。(Writing and Difference 279-80)

テキストをテキストとして認識しその構造を解釈するための規範や記号であると考えられている事柄が、簡単に言うと「トレース (痕跡)」である。「トレース (痕跡)」は、言語が提示しているはずのリアリティや、その仲介されることのないリアリティ (現実) のアブセンス (不在) を区分けする。このように、テキストは、過激な自主性を前提とする。テキストは「フラックス (流動)」つまり、パリンプセスト (多層構造) である。パリンプセストは、客観的リアリティとそれを認知できる個人の意識がどのようなものであって

も、それらの間に存在する、かすかな関連性を常に過小評価する。ディコンストラクション（脱構築）は、リーディング（読解）のモデル（模型）を提供するが、このリーディングの方法によってテキストを入念に調べると、隠された前提、主にプレゼンス（現前）のみせかけを発見する。これらの前提が暴露されることにより、テキストは分解され「ディコンストラクション（脱構築）」がなされる。J・ヒリス・ミラー（J. Hillis Miller）は、さらに詳細な説明をする。ディコンストラクション（脱構築）的批評家は、「構築物が立っている基盤を滅ぼした。意図的であるかどうかは分からないが、テキストが基盤を壊滅したことを証明することによって結果的に招いた状態だ。ディコンストラクション（脱構築）とは、[テキスト] が既に自己解体したことの証しである。」（Stevens' Rock 330）

ディコンストラクション（脱構築）とは、インテンショナル・ファラシイ（意図を考慮する誤謬）とアフェクティブ・ファラシイ（感情を考慮する誤謬）に対するニュー・クリティシズム（新批評）的命令のアイロニックな理想（apotheosis）であると解釈することができる。著者観と、少なくともあらゆる伝統的意味での読者観を廃棄した時に、テキストが最高の主権を獲得する。リテラシーの他の要素（著者、テキスト、リアリティ）は、幻想的であると言われているほどには、実際には消滅した存在ではない。デリダは、「先験的意図の不在が、意味の支配と戯れまで無限におよぶ」と結論を出す。（「エクリチュールと差異」280）

### 読者反応批評（Reader-Response criticism）

リーディング理解の第二のモデルは、ディコンストラクション（脱構築）と平行関係にある「読者反応批評（Reader-Response criticism）」である。「読者反応批評」は、いくつかの批評戦略をカバーする幅広いカテゴリーである。その戦略の焦点は、テキストに対する読者の反応にある。読者とテキスト、主体（the subject）と客体（the object）の前提や、分断困難性を共有している。「読者反応批評」の規定には、以下のような多様な方法論がある。1）ノーマン・ホランド（Norman Holland）とデビット・ブライヒ（David Bleich）の心理学モデル、2）ルイズ・ローゼンブラット（Louise Rosenblatt）とヴォルフガング・イーザー（Wolfgang Iser）の現象学モデル、3）スタンレイ・フィッシュ（Stanley Fish）の社会学モデル。

ホランドのフロイト的リーディング・モデルが「主題としているのは、ニュー・クリティシズムが要求するような假定上の分離（supposed isolation）されたテキストではなく、かつての印象批評のようにラプロディ（叙事詩）化された自己でもない。それは、読者とテキストの間のトランザクション（交流）である。」（Transactive Criticism（交流批評）

334) ホランド的方法論の中心概念は、「アイデンティティ・テーマ (主体性の概念)」観である。「一人の音楽家が一つのメロディのヴァリエーション (変奏曲) の無限性を表現するように、我々は、各人をアイデンティティ・テーマ (主体性の概念) のヴァリエーションを生きる存在と考えることによって、個々人について明確に知る事ができる。」読者は、このアイデンティティ・テーマ (主体性の概念) から、自己と他のトランザクション (交流) を考える。このテーマは、読者が世界を認識する時の、特定のテキストを含むインタープリティブ・マトリクス (解釈母体) としての役割を果たす。

実際のリーディングの際、個人個人が「自分自身を象徴し複製するためのリテラリー・ワーク (文学作業) を利用する。我々はテキストを通して願望と適応の我々自身の特徴的パターンを作動させる。」(Unity 124) 読者は、テキストから意味を「抽出」するのではなく、意味をコンストラクト (構築) する。その時「アイデンティティ・テーマ (主体性の概念)」をモデルとして利用する。ホランドにとって、「文学テキストとは、結局、客観的に言うと、乾燥した木のパルプについたカーボンブラックのシミのコンフィギュレーション (配置) から構成されている。これらのマーク (印) が、言葉になり、これらの言葉がイメージ、メタファー、性格、出来事になるが、それは読者が眠れる美女に対して王子の役割を果たすからである。」(Five Readers Reading 276) 認識とは、解釈である。読者がディコード (暗号解釈) するのを待ち構えている自立的客観的テキストが存在するわけではない。リーディングとは、「読者が自分自身の意識と下意識を写すように、正統の梱包を解くことであり、長い間暗黙状態の想定を明示することである。」(Transactive Teaching 276)

デビット・ブライヒ (David Bleich) のリーディングモデルは、ホランドのフロイト的モデルと方向性が似ているが、そこを出発点に様々に重要な手法を展開する。ブライヒの意味 (「テキストでなく、人間における意味」) へのアプローチは、ホランドのアプローチや、他の読者反応批評 (reader-response critics) に相似しているが、感情反応 (emotional response) の強調が、際立って特徴的である。意味とは、「読者によるストーリー (物語) の感情的理解の結果」である。(Subjective Character 746) ブライヒの批評行為の基礎とは、ホランドの「アイデンティティ・テーマ (主体性の概念)」ではなく、「フィクションの創造」である。「フィクションの創造」は、「進行中の人間関係の可能性を絶えずテストする。」「客観的条件の枠の中にいる。その真実性ではなく、その成果は、他の読者によるリ・アシミレーション (再同化) の能力によって測定することができる。」(743-44, 151-52) テキストに対する主体的反応、つまり「批評解釈」とは、リーディングの一時的行為とは切り離されている。それは、ポスト・リーディング行動 (読書後の行動) と言い換え

ることができる。ホランドとは異なりブライヒは、批評とリーディングを合併させない。批評とリーディングは両者とも「主観的」であるので、客観的に生み出され決定された「テキスト」に説明責任はないが、我々は両者を区別し、他の読者に接近できる「客観的用語」によってこの主観性を表現することができる。

ホランドとブライヒのアプローチは、イーザーやローゼンブラットの現象学モデルやフィッシュの社会学モデルとは異なり、心理学モデルにカテゴリー化される。ステイブ・メイロー (Steven Mailloux) によると、「(ホランドとブライヒ) は、集団に対する個人の優位性を強調する。リーディングとは、パーソナリティ (人格) のファンクション (働き) であり、共有された戦略ではない。」(Reader-Response Criticism 423) ホランドの結論は、「読者が自分が読んだ内容を実際にどう語るか、その内容を詳細に分析することにより、彼 (ホランド) のような批評家やブライヒと他の読者反応批評家の間に違いが生じる。」(Unity 132) それとは反対に、リーディングの「現象学」は、ルイーズ・ローゼンブラットとヴォルフガング・イーザーが先在のテキストを事実として仮定する批評モデルの特徴を示す。この先在のテキストと読者は交流をはかるので、このテキストは読者の反応を制限する。「芸術の現象学的理論は概念に強調をおく。文学作品を考える際は、実際のテキストだけでなく、そのテキストに反応することによって巻き起こる行動をも同等に考慮しなければならない。」とイーザーは、主張する。さらに、ローゼンブラットにとってテキストとは個人が応答する環境の要素になる。「同じトランザクション (交流) が様々な様相を表すので、客体と主体の明白な境界は、適切とは言えない。読者はテキストに注意を傾け、テキストは読者によって動かされる。」とローゼンブラットは断言する。ローゼンブラットによると、「『主体的』反応とは、全く反対側のトランザクショナル (交流) な極に、オブジェクト『目的／対象／客体』を想定する。文学作品のリーディングと批評は、どちらの用語の使用もさけるほうが賢明である。」(18)

このように、リーディングの現象学的見解では、読者の主体的相互関係が引き出されるが、著者の意図が修正された形態に従うテキストの余地もある。イーザーによると、文学作品とは、「著者自ら物事を実行するタスク (作業) であり、著者によって生み出され、読者の想像力を引き出すような方法でなければならない。なぜならばリーディングとは、主体的かつ想像的な時にのみ喜びを感じる経験だからだ。」読者への招きの中で、「テキストとは、十分に遠くへ行かない状態や、遠すぎる場所へ行ってしまう状態が、退屈と過労による境界を形成していると言えるような状態である。その境界を超えて読者はプレイ (戯れ) の領域へと脱出する。」とイーザーは述べる。このようにイーザーとローゼンブラットは、脱構築主義者や心理学批評家とは異なるテキストのより「客観的」見解に接近す

る。「意味は、テキストそのものによって条件づけられる。読者が自らそれ（意味）を引き出すような方法で行う。」（「不確定性（Indeterminacy）」43）

イーザーとローゼンブラットは、テキストとは、読者とのトランザクション（交流）を開始することだと考える。スタンレイ・フィッシュ（Stanley Fish）の見解は彼等とは異なり、読者がテキストを始動する。つまり、読者が自らの意識からテキストを構成することを提案している。フィッシュの「情動文体論（affective stylistics）」では、テキストが先在の自らの権利において存在しているのではなく、テキストとは社会的に生成された解釈のコンセンサス、又は、昨今発表されたように、「解釈共同体（interpretive community）の権威」を、テキストにもたらす読者による構築物であると考ええる。（Is There a Text in This Class? 303-21）フィッシュの見解は、個人個人の読者が消滅し、読者の共同体の中で機能する慣習システム、テキストの意味の生産を支配する慣習のシステムに飲み込まれていく一種の構造主義を反映する。「Surprised by Sin（罪に驚く）」と「Self-Consuming Artifacts（自己消費型の作品）」の彼の初期の作品においてフィッシュは、テキストが何であるかを暗に示した。それは、読者の操作、ある種の認知行動（cognitive act）を読者に強要させる批評家フィッシュが語る何かである。しかし、フィッシュのアプローチには変化が生じる。最新の著作の現象学アプローチ（テキストと読者の相互依存が存在する方法）から、文学が一枚の紙の上に書かれた言葉として存在するのではなく、読者が属する解釈共同体の中に存在するアプローチへのシフトである。

フィッシュは、認知（perception）とは常に解釈を意味し、批評スタンスが常に特定のリーディング・ストラテジーに由来する必然の結果を伴うと考えるホルンドの仮定を受け入れる。書かれたテキストもしくは会話（口語伝達）における特定の発話の理解は、テキストに由来した意味から来るのではなく、二人の対話者から成る共同体の共有の慣習から来る。フィッシュは、彼の見解が過激な多元論と不確定性に至ると認めているが、これが、アナキー（無秩序）や相対主義に必然的に至るような考え方を否認する。「意味の無限の多義性は、すでに埋め込まれていない状態の中に文が存在している場合は恐怖となる。しかし、それらはなんらかの状況の機能を視野に入れている。その状態は、もし所在を確定することができるのなら規範的になるであろうし、もしその規範が漠然とした不確実なものなら、その状態は実に煩わしい物となる。」しかし、フィッシュが、指摘するように、「このような状態は存在しない。文は、状況のなかにだけ出現する。それらの状況のなかで、発話の規範的意味は、常に明白であり、少なくとも、理解が可能である。しかし、別の状況では、同じ発話がもうすでに同じとは言えないが、それがその意味はもはや明白でも入手可能でもない別の規範的意味になることになる。」（307-308）

フィッシュは、この議論に従い、彼のパラドックスを批判する批評家、すなわちデリダが承認し容認しているパラドックスを非難する批評家の影響力を中和しようとしている。パラドックスとは、特権を与える行為 (privileging) を過小評価する見解を説明することによって、自分自身の言語に特権を与える行為を意味する。M. H. エイブラムズ (M. H. Abrams) はフィッシュを非難して次のように述べる。フィッシュは「他人のテキストを読む時に、彼自身の解釈ストラテジー」を紹介しつつも、自分自身の解釈の方法と結果を自分の読者に伝える際に共同体の規範にそれとなく依存している。(How to Do Things with Texts 587) フィッシュは、反論する。「私が語る理由、エイブラムズのような誰かによって理解されると仮定する理由は、私が彼に対して抱く興味と関心の内側から彼に語りかけるからである。それは彼が私の言葉を聞いてくれていると想定することによって、その興味と関心に関連があるからである。もしその後が続いてコミュニケーションと理解があるのなら、それは彼と私が一つの言語を共有するからではなく、一つの考え方や一つの人生の形を我々が共有し、我々が一つの世界との関連を共有するからである。」(307-308) コミュニケーションの発生と言い換えることができる。それは言語の決定性や、客観的现实ではなく、エイブラムズとフィッシュが偶然にも同じ「解釈共同体」の共有、すなわち相互文脈 (mutual context) の中に記号 (sign) システムを共有するために発生したコミュニケーションである。

スティーブン・メイロー (Steven Mailloux) は、多様な読者反応批評を比較し、要約するための有益なチャートにまとめた。その一部を私は適用する。<sup>10</sup>

客観性	現象学的	社会学的
ブライヒ, ホランド	イーザー, ローゼンブラット	フィッシュ
客観性の優位／	テキストと読者の間の相互作用	解釈的共同体
テキストと読者の		
アイデンティティ・テーマ		
の交流		

客観主義者のアプローチでは、読者がテキストとのコンタクトを始動する存在である。テキストは、紙上の黒い印であるという意味では客観的存在である。読者はテキストのリーディングに基づいて「フィクションを創造」する (ブライヒ)。あるいは、テキスト上の「アイデンティティ・テーマ」(ホランド) を強要する。テキストは本質的には明確なエンティティ (存在) として分解される。現象学的アプローチはテキストに最小限度の客

観的ステータスを与えるが、テキストが完全な文学的作品 (literary artifact) となるためには読者の注意力が必要であると指摘する。フィッシュの社会学的アプローチは、テキストに対しても個々のアイデンティティを持つ読者に対しても懐疑的である。テキストと読者は解釈共同体の内部で機能する。解釈共同体の中で彼等は探し出され、すでにしかるべき所に存在する意味の慣習に従う。

### 弁証法的批評

脱構築と読者反応批評の共通点は、伝統的批評の「ナイーブ・リアリズム (素朴实在論)」の拒絶にある。両者は言語の擬態機能を疑問視する。これらのリテラシー概念と対照的なのが、「弁証法的批評」と私があえて名付けたリーディングモデルである。弁証法的批評の特徴は、意味の確定の可能性の弁護、リアリティを表現するための言語能力への信頼、読者から分離独立したテキストの地位の確認である。しかしながら、この弁証法的批評が「学派」や明確なエンティティ (存在) であるかのように述べることは誤解を招く恐れがある。弁証法的批評家は、ニュー・クリティシズムの一部の不满分子をはじめ多くの伝統的学者から構成されている。脱構築と読者反応批評がインタープリティブ・アナーキー (解釈無秩序) を誘発すると伝統的学者は考える。

共通の「敵」を共通項とする弁証法批評家は、折衷的な存在であると考えられている。M. H. エイブラムズ、ウエイン・ブース、ジョン・ライチェルト、ラルフ・レイダー、ジェラルド・グラフ等の批評家は、詩が「意味」と「存在」両方の存在であることに賛同する詩学観の弁証家である。著者の意図がテキストに対する読者反応を抑制する存在であるとする詩論である。<sup>11</sup> この観点を明確に強調している批評家が、E. D. ハーシュ (E. D. Hirsch) である。

ハーシュは、現代のディスコース研究における中枢的存在であり、彼の作品はリテラシーの弁証法的モデルの確認に有益なローカス (所在) の役目を果たしている。レトリックと詩学の両方の分野を研究する学者としてハーシュの「解釈の目的 (The Aims of Interpretation)」と「解釈の有効性 (Validity in Interpretation)」の著作は、文学理論の弁証法的立場の古典的言説である。その一方、「コンポジションの哲学 (The Philosophy of Composition)」は、同様のアプローチをライティングの教授法にも応用する試みである。ハーシュは、現代の批評運動を、ニュー・クリティシズムのステリテイ (滅菌性) に対する極端な反動と考えた。M. H. エイブラムズは、ニュー・クリティシズムを「固定の受容的意味を付与された独立した言語構造物としての各作品の分析を追求する。」と表現する。 (『文学用語集』 Glossary of Literary Terms 189) ニュー・クリティシズムは「詳細な説明

(explication)」を必要とする言語学的対象としてのテキストの概念化を計った。「曖昧性」「テンション」「アイロニー」「パラドックス」等の文学的性質、すなわち洞察力と詳細な読み方 (close reading) を必要とする微妙な考えに特権を与えた。しかし、ハーシュは、ニュー・クリティシズムが文学に授けた特権的地位を否定する。「コルリッジから現在に至るまでの文学論において、普通に書かれたスピーチ (発話) と文学的に書かれたスピーチのヴァイアブル (存続可能) な性質を区別できた人は一人もいない。」(Aims of Interpretation 90) 文学がディスコースの他の形態と異なるわけではないと考えたために文学の識別に失敗したと、ハーシュは考えた。「文学には、美的であろうとなかろうと、独立したエッセンスは存在しない。文学とは、一般的に明確な痕跡を示さない言語学的作品の任意の区別であり、アリストテレス的種 (species) としては、定義不可能である。」(Aims 135)

この問題に対するハーシュのストラテジーとは、文学に対して別の解釈学的スタンスを要求するこれらの理論家に対して武装解除を行うことである。彼等は、文学が「通常の」言語の使用によって作り出されたテキストとは区別されていることを根拠に別のスタンスを要求する。文学に対するアプローチや、テキストから意味を回復し構築する能力は、メニューや朝刊を読む時と同様の理解の合理的なプロセスから生じる。文学的テキストをテキストとして弱体化するどのような試みであっても、人間的に理解の可能性を損なうことになる。ハーシュが考えるデリダやフィッシュの別の一例は、「認知論的無神論」である。読者と「知る人 (knower)」の両方を衰弱させる過激な懐疑論である。(Aims 149)

ハーシュには3種類の特徴的ストラテジーが存在する。特別な引用と詳細な説明に値するストラテジーは、より鮮明に弁証法的批評に焦点を当てる。ハーシュは、まず「権威主義的意図」観の確認を試みる。「テキストとは著者が意図した内容を意味する。」その意味とは「著者が意図した言葉の意味である。」時間を経ても安定した意味であり、「著者の見解の関連側面」の注意深い研究によって回復可能な意味である。関連側面の中には、「著者の文化的環境、彼の個人的先入観、著者が使用可能な文学的かつ総称的慣習」などが含まれる。(Validity in Interpretation 8) これは、テキストが曖昧でないとか、複数の意味を帯びていないとかという意味ではなく、単純に原則的に、このような言葉の意味は決定的であるという意味である。

第二に、ハーシュは「ミーニング (意味)」と「シグニフィカンس (意義)」の間に重要な区別を行う。「ミーニングとはテキストが表す内容である。特定のサイン (記号) の連続の使用によって著者が意味する内容である。これは、サインが表す内容である。その反対に、シグニフィカンスとは、ミーニングとその人又は概念、状況、想像しうること

は何であっても、それらとの関係を指す名称である。」(Validity 8) ハーシュにとってのミーニングとは不変である。それは密接に著者の意図と一体化しているためだ。ミーニングの時間は一定化しているので、その元々の発話の変更や分離は不可能である。それは確定的であり、いつでもアクセス可能であり、可変性的影響を受けることはない。その反対に、シグニフィカンスとは「常に関係を意味する。」結果的に、コンテキストからコンテキストへ、世代から世代へ、年代から年代へと変化する。(Validity 8) シグニフィカンスは可変的であるが、ミーニングは可変的ではない。この差の指摘をおこなったハーシュは、「解釈」と「批評」の違いを説明するための方法論を得た。著者の意味する内容を理解する試みの「解釈」と、ミーニングに付随するシグニフィカンスの所在を突き止める試みの「批評」の差を表す方法論だ。ミーニングの確定性は、読者の間にあるシグニフィカンスの多様性を許容しつつ維持されていく。

ハーシュの第三のストラテジーは、「フレームワークの神話」の妥当性を疑問視したことである。「フレームワークの神話」は、科学哲学者のカール・ポパー (Karl Popper) から借用した用語である。ポパーも「フレームワークの神話」の妥当性を疑問視する。ハーシュによると、「フレームワークの神話」とは「困難性の単純な誇張によって起こる不可能性への変化という意味で、それは、非合理主義の中心的防波堤である。」ハーシュは、トーマス・クーン (Thomas Kuhn) のパラダイム概念を論破し、それが「世界観、イデオロギー、認識論の最新科学的バージョンの文書化である」ことを否定した。このような全体に渡るフレームワークの効果は、問題性と曖昧性を特徴とする作品 (artifact) を孤立化させ、ドクトリン (学説) やシステム (制度) へと地位を上げた。一つのテキストがそれ自身の想像上の内容 (fictiveness) (例えば、「トリストラム・シャンディ (Tristram Shandy)」や「贋金造り (Les Faux Monnayeurs)」)「に関する」事実があったとしても、全てのテキストをこのような存在であると見なすライセンス (免許証) にはならない。それらの意味を「創造する」役目を読者に期待するテキストもあるが、全てのテキストが構造化した (constructed) と見なすための前例にはならない。言い換えると、ハーシュの論点は、懐疑主義や相対主義がイデオロギーとしてテキストのリーディングへと取り込まれ、言語学、哲学、心理学として偽装された形で存在すると論ずる。ハーシュのリテラシー概念は、それ自体の外側にリアリティを伝えることができる言語の能力の信頼である。すなわち、著者の意識的コントロールの下にある言語への信頼感であり、読者にとってのその意味を時間を経てとらえることができる言語能力への信頼である。

### III

このような過去 20 年間のリーディングとライティングの概念化は重大な問題であった。「ライティング (書くこと)」と「リーディング (読むこと)」を自動詞として処理する考え方があった。読者は外延的意味と著者を交換した。行動としての批評はリーディング (読書行為) と一体化した。テキストは長い間リテラシー教育における安定性と信頼度の高い構成要素であったが、今はこれまでの権威を捨てテキストが名付ける世界についての真理を伝える。過去の喜びと単純さは去った。バリー・チャボット (Barry Chabot) が嘆くように、「リーディング (読書行為) の平凡な行為は、それを無邪気だが、未経験者に反逆をもたらすような行為へと誘導した。」簡単に決定的意味が存在した古き良き時代の読者は、容易に「自分の心をテキスト全体に開き、それがゆっくりと一つになるまでテキストが自らの意識を満たし、やがて治めることができた。特に突飛な文は我々を困惑させる、ある行動へと走らせるが、このような場合があったとしても、テキストが必要不可欠な道しるべを提供し、たとえそういう状態があったとしても、結果的にテキストがリーディングの顕著な状態の無活動へと導いてくれると推測することができた。」(425)

どこから見ても伝統的西洋のリテラシー (読解力) は、瀕死の状態である。過去 20 年間の批評家は、読者の帝国主義を、著者の権威を上回る名も無き文化的暴力を激励し歓迎した。結果的に「意味」するにしても、「存在」するにしても、読者と読者の解釈共同体の気まぐれの意のままの状態である。20 世紀後半の批評を活気づけたのは、他の作家の世界に居住する希望や異なる世界観に直面する発見やチャレンジではなく、原則的にナルシズムである。言語の牢獄にとらわれた読者は、パーソンフット (個性) の牢獄という宣告を受けた。彼等は彼等を育てた文化、ジェンダー、宗教、教育、人種という狭い領域を、読者として良い場合でも越えるつもりがないか、最悪の場合は越える能力がないことを発見する。彼等は、自分が見たいものだけを見る。聞きたいもののみに耳を傾けるようになる。

リテラシーの現代的見方では、一つのフォーマリズム (形式主義) の解放後に、別のフォーマリズムの虜になる。我々の新しい批評方法によって暴露されたものは何もないことが明らかになった。存在の中心や根拠のない、テキストの外側や私の外側にも、私が忠誠を誓えるような、それによって人間の経験のジャングルをうまく舵取りをしつつ進んで行くことのできるようなレファレンスポイント (基準点) が存在しない。当初はリアリズムの衰弱からの必死の飛行だったが、今は文学的唯我論への寂しい旅となった。

C. S. ルイスの生涯は、この教理的学問的塹壕の構築作業の目撃を逃れることができたが、彼の作品には教理的ストラテジーの表現が感じられる。ルイスは自分の条件を確固と保持したが、ニュー・クリティシズムを含む批評の流れの中に足を入れることによって、著者、読者、テキストとリアリティ間の関係を実地調査し、偽りと矛盾を判別する目を養うことができた。

1963年の死の直前の数カ月前にルイスは、ハロルド・ブルームの「The Visionary Company」についての書評を出した。もちろんその当時のブルームは、詩の影響について特有の見解の理論家であり、スポークスマンとして脱構築批評家の間で徐々に頭角を現す存在となっていた。<sup>12</sup> ブルームの初期の作品に対する書評でルイスは、ブルームの散文を読解する困難さを論じ、彼の新造語の曖昧性や気取りさに触れている。「時に小さな修正により私は一つの意味をたたき出すが、それがほんとうにブルーム氏のものであるかどうか確信が持てない。」(74) 不透明さを批判することから離れると、ルイスはかえって辛らつな批判をする。「時々理解しがたいと思う。ブルーム氏は、自分が完全に十分に知らない内容について、単純に間違っているのはどこかという判断を、彼がくだしている点である。」(74) ルイスによると、ブルームは単にテキストを論じているのではなく、彼の反応への制限を受容することを拒否し、「イギリスのロマン主義の詩の読解 (A Reading of English Romantic Poetry)」という副題を文字どおりの意味で理解するべきであると確信している。それは、通常の意味では、決定的な批判ではない。ブルームの経歴の初期の段階においては、彼は昨今のような特徴の読解観、批評観を形成した。「詩学が詩を解釈する時に役立つと言う前に、それは詩に所属していなければならない、そして、詩でなければならない。」(Kabbalah and Criticism 109)

ルイスは、ブルームのリーディング・スタンス（読解姿勢）について論じ明らかにする。ブルームはテキストにも詩人に対しても興味が欠落している。彼の興味の対象は、リーディング、それも特に彼自身の（著作）のリーディングにあり、「批評」のほうに興味に向いていない。「著作は、そのほとんど全ての部分が解説に占有されている。様々な詩人が語る内容、詩の作品から直接抽出された内容の解説である。たとえ、このような論争において、作品の間にある詩的業績の大きな違いを彼が論じ、目が見えなくなっているとしても、ブルーム氏を責めるべきではない。それはしかたがないことだ。」(74)

リテラシーの新モデル3例の概観に関する本論文は、著者、読者、テキスト間の関係についてルイスがどのような見解であるかを検証するための視点を提供する。この視点から検証することによって、現代の読者と批評家の間の敵対する主張や概念に対して、調停者としてのルイス論を決定することができる。

## 注 記

### 1.

参照, *A Theory Discourse*, ジェームズ・L・キニアヴィー著 (James L. Kinneavy), デイスコース論, 英語及び言語に関する現代的分野において文学的追求と修辭的追求の關係に関する議論 (Englewood Cliffs: Prentice, 1971) 1-17

*Graduate Education in Rhetoric: Attitudes and Implications*, ウィリアム・A・コヴィノ, 他著 (William Covino, et al.), *College English*, 42 (1980) : 390-98

*Theories and Expectations: On Conceiving Composition and Rhetoric as a Discipline*, ダグラス・B・パーク著 (Douglas B. Park), *College English*, 41 (1979) : 47-56

*College English Departments: We May Be Present at Their Birth*, J. N. フック著 (J. N. Hook), *College English*, 40 (1978) : 269-73

### 2.

以下の著作は, 文芸批評家, 言語学者, 修辭学者間の興味の結合を示唆している。

*Rhetoric in Transition*, ユージン・ホワイト編集 (Eugene White, ed.) (University Park, PA: The Pennsylvania State UP, 1980)

*Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior*, ケネス・L・パイク著 (Kenneth L. Pike) (The Hague: Mouton, 1967)

*The Thread of Discourse*, ジョゼフ・E・グリムズ著 (Joseph E. Grimes) (The Hague: Mouton, 1975)

*Text: Discourse and Process: Toward a Multidisciplinary Science of Texts*, ロバート・ド・ボーグランデ著 (Robert de Beaugrande) (Norwood, NJ: Ablex, 1980)

*Speech Acts*, ジョン・R・サール著 (John R. Searle) (Cambridge: Cambridge UP, 1969)

*Knowing and Being*, マイケル・ポランニー著 (Michael Polanyi) (Chicago: U of Chicago P, 1974)

*The Archaeology of Knowledge*, マイケル・フーコー著 (Michel Foucault) (New York: Harper, 1972)

### 3.

参照, *American Literacy*, アーノルド・L・ゴールドスミス著 (Arnold L. Goldsmith) (Criticism: 1905-1965) (Boston: Twayne, 1979) 102-36

ニュー・クリティックスの代表的テキスト:

*Science and Poetry* (New York: Norton, 1926), 及び *Principles of Literary Criticism* (New York: Harcourt, 1928), I. A. リチャーズ著 (I. A. Richards)

*The Verbal Icon*, W. K. ウィムザットとモンロー・ビアーズリー共著 (W. K. Wimsatt and Monroe Beardsley) (Lexington: The U of Kentucky P, 1954)

*Theory of Literature*, レネ・ウエレックとオースティン・ウォーレン共著 (Rene Welleck and Austin Warren) (New York: Harcourt, 1975)

*Understanding Poetry*, クリーンス・ブルックスとロバート・ベン・ウォーレン共著 (Cleanth Brooks and Robert Penn Warren) (New York: Holt, 1938)

*Beating Bushes: Selected Essays 1941-1970* (New York: New Directions Publishing, 1972), *The New Criticism* (Norfolk, CT.: New Directions Publishing, 1941) ジョン・クロウ・ランサム著 (John Crowe Ransom)

### 4.

The Intentional Fallacy と The Affective Fallacy は, ウィムザットとビアーズリー (Wimsatt and Beardsley)

の *The Verval Icon* の最初のエッセー。cf. n. 3.

5.

参照, *Poetic Statement and critical Dogma*, ジェラルド・グラフ著 (Gerald Graff), ニュー・クリティックスの (特に, リチャーズの) 非命題的スタンスに関する徹底的批評 (Chicago: U of Chicago P, 1970)

6.

特記: ノースラップ・フライ著 (Northrop Frye), *Anatomy of Criticism* (Princeton: Princeton UP, 1957) と *The Stubborn Structure* (Ithaca: Cornell UP, 1970) の文芸論は意図的に省く。フライのアプローチは, 明らかにニュー・クリティシズムに代わるものであり, フライは「美の価値観」とカテゴリー化した。しかし, フライのテクスチャリティ観には, ジャック・デリダやスタンレイ・フィッシュ等のような伝統的見解からの過激な脱出が見られない。現代詩学におけるフライの立場に関する議論は, フランク・レントリッキア著 (Frank Lentricchia), *After the New Criticism* (Chicago: U of Chicago P, 1980) 2-27 を参照。

7.

過去4~5年, ディコンストラクションに関するいくつかの包括的な批評が出た。以下はその中の最も精力的批評から選択したリストである。

*Literature Against Itself*, ジェラルド・グラフ著 (Gerald Graff) (Chicago: U of Chicago P, 1979)

*After the New Criticism*, フランク・レントリッキア著 (Frank Lentricchia) (Chicago: University of Chicago P, 1980)

*Critical Understanding*, ウェイン・C・ブース著 (Wayne C. Booth) (Chicago: University of Chicago P, 1978)

*The Deconstructive Angel*, 及び *How to Do Things with Texts*, M. H. エイブラムズ著 (M. H. Abrams) (Critical Inquiry, 3 (1977) : 425-38) (Partisan Review, 46 (1979) : 566-88)

*Deconstructive Criticism*, ヴィンセント・B・リーチ著 (Vincent B. Leitch) (New York: Columbia UP, 1983)

*On Deconstruction: Theory and Criticism after Structuralism*, ジョナサン・カラー著 (Jonathan Culler) (Ithaca, NY: Cornell UP, 1982)

*Writing and Reading differently*, G・ダグラス・アトキンズとマイケル・L・ジョンソン編集 (G. Douglas Atkins and Michael L. Johnson, eds.) (Lawrence, Kansas: UP of Kansas, 1985)

8.

*The Critic as Host*, J・ヒリス・ミラー著 (J. Hillis Miller) (Critical Inquiry, 3 (1977) : 439-47)

*Saving the Text: Literature/Derrida/Philosophy*, ジョフリー・ハートマン著 (Geoffrey Hartman) (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980)

*Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism*, 及び *Shelley disfigured*, ポール・ド・マン著 (Paul de Man) (New York: Oxford UP, 1971)

*Deconstruction and Criticism*, ジョフリー・ハートマン編集 (Geoffrey Hartman, ed.) (New York: Seabury, 1979) 39-74

9.

デリダは, 言葉に関する概念の伝達に「ディファランス (差異)」という新語を意図的に造語した。言葉には,

(1) 各言葉の間の違いにおいて意味が存在する。

(2) ゆえに, それらの意味を無期限に延期する。

デリダの基本的立場を確定させた独創的 3 作品は, *Speech and Phenomena and Other Essays on Husserl's Theory of Signs*, デビット・B・アリソン翻訳 (Evanston, IL: Northwestern UP, 1973), *Of Grammatology*, ガヤトリ・チャクラボルティ・スピバク翻訳 (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1976), *Writing and Difference*, アラン・パス翻訳 (Chicago: U of Chicago P, 1978)

10.

*Reader-Response Criticism ?*, スティーブン・メイロー著 (Steven Mailloux) (Genre, 10 (1977) : 415)

11.

参照, n. 7. *Making Sense of Literature*, 批評世界に対するジョン・ライヘルト (John Reichert) の貢献, (Chicago: U of Chicago P, 1977)

12.

参照, *Fear and Trembling at Yale*, ジェラルド・グラフ著 (Gerald Graff) (American Scholar, 46 (1977) : 467-78)

## 翻訳者あとがき

今回の発表は, オハイオ州立大学教授 Bruce L. Edwards, Jr.\*<sup>1</sup>の著書「A Rhetoric of Reading: C. S. Lewis's Defense of Western Literacy」\*<sup>2</sup>のイントロダクションと第一章の翻訳です。謝辞, 序文は省略しました。今後, 順次, 第二章以下を発表予定です。Dr. Edwards には, 御著書の日本語翻訳への許可を賜り深く感謝申し上げます。

\* 1 ボーリング・グリーン州立大学 (オハイオ) 英語学・生涯／遠隔教育学教授, C. S. ルイスの研究者として著書・論文多数。

\* 2 1986 年出版 (ISBN : 0-939555-01-8), 米国議会図書館カード番号 (86-17937), 1978 年テキサス大学 Ph.D 論文

翻訳に使用したカタカナ表記の日本語訳に関して, さらに検討の余地が残されています。誤訳や不十分な理解に関して大方の御教示をたまわれば幸いです。